

干支の戌にちなんで
 故吉野弘さんの詩「犬
 とサラリーマン」を紹
 介したいのだが、小欄
 には収まりきらない。
 抜粋になるのをお許し
 願いたい▼「また来た。
 /ビスケットを投げた
 がやっぱり食わない。
 黙って僕を見つめてい
 る」。やせた黒い犬で
 鑑札もなく愛想も
 ない。そのくせ毎
 日のように台所へ
 顔を出す▼「僕」
 はそれまでの「ほ
 どこし」が思い上
 がりだったと悔や
 み、その夜は黙って一
 緒に居た。何も与えず
 欲しがらず。「星が美
 しく、犬の眼がやさし
 かった」▼この謎めい
 た犬は、かつて人に飼
 われていた。「僕」は
 サラリーマン。他に依
 存するという点で同じ
 身の上だった。そして
 最終連。「そんな淋し

越山若水

2018.1.6

い夢を抱えて 僕は翌
 朝 いつもの道を出勤
 した。」▼そう、夢だ
 った。犬は自立を果た
 したものの象徴だろう
 か。それに内心憧れる
 「僕」はといえば相変
 わらず。2018年の
 仕事始めを済ませ、身
 につまされる人もいる
 だろうか▼相場の格言
 に「戌笑う」とあ
 る通り、と言おう
 か。4日の東証大
 発会は終値で26年
 ぶりの高値を付け
 た。幸先よしと喜
 びたいけれど、油
 断は禁物▼「今年は世
 界、日本の産業・社会
 構造が一変する大きな
 変革の始まり」。県内
 経済界や各社のトップ
 語録にも、先行きへの
 危機感がにじんだ。こ
 の変革は、たぶん「鑑
 札」付きの従順な犬で
 は乗り切れない。自立
 した社員でありたい。